源氏目録巻中

十六 乙女

十 [illegible]

日 [illegible]

日 [illegible]

日 みゆき

日 [illegible]

十九 [illegible]

廿一 [illegible]

廿四 みのり

十七 玉鬘

[illegible]

日 [illegible]

日 [illegible]

日 [illegible]

十八 梅ヶえ

二十 [illegible]

廿二 [illegible]

廿三 [illegible]

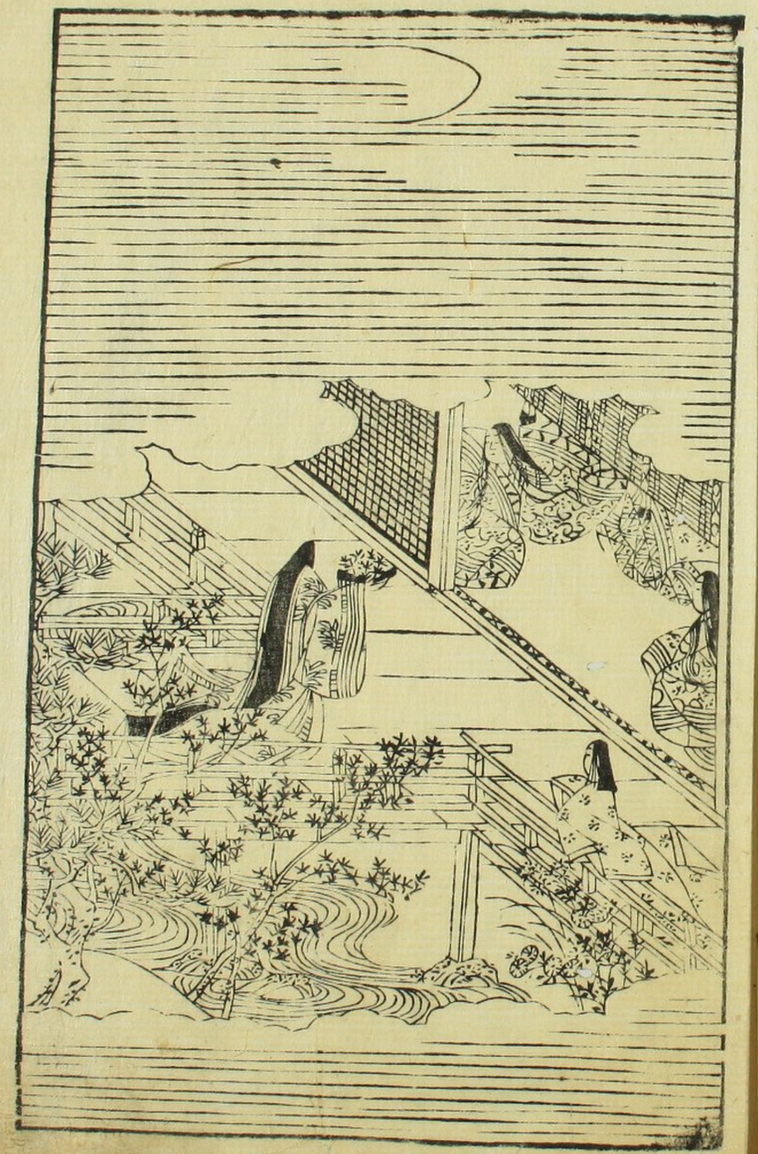
廿五 [illegible]

十六　乙女

此まき乙女といふハ、すなはち賀茂の臨時のまつりといふす
と大内にて始めさせ給ふ時、寛平八年十一月廿二
よりうちの女房をそろへて天人のまひをうつ
いたしたてゝ舞姫とて大内裏へ下一人ありしに
くまらあせられけんしかとも御にかし侍れ
めれとのこゝろハむかしを思ひてあそひて舞の
まいのひてのそきて御覧ありしかハしつかしの
着くわしたまひし事ありしとてとめたまひの舞
しめていまさら見かくわしめと人ありけるそ
もされかしめ出くそ見をいまハ年ふりぬる
ん我も年ふりぬれハしめてこゝろの御ありさ
をとめこそ花さいねかしあまつ神

あまつ雲かくれ

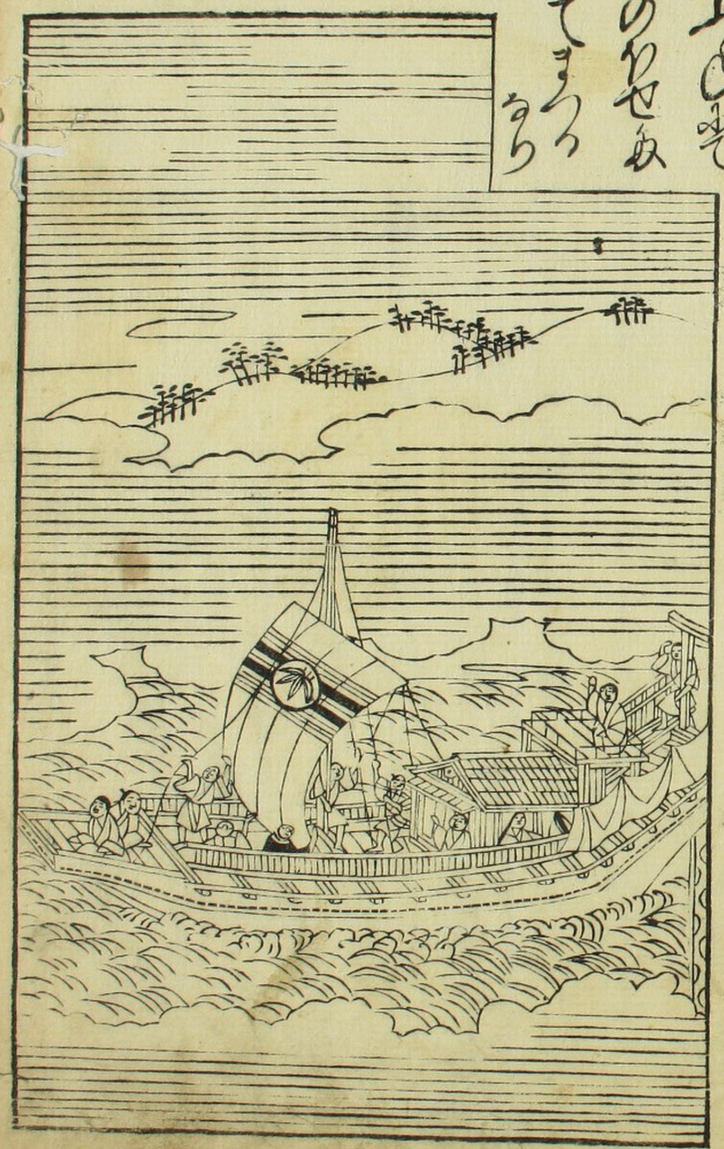
良岑宗貞
ぶんや中納言

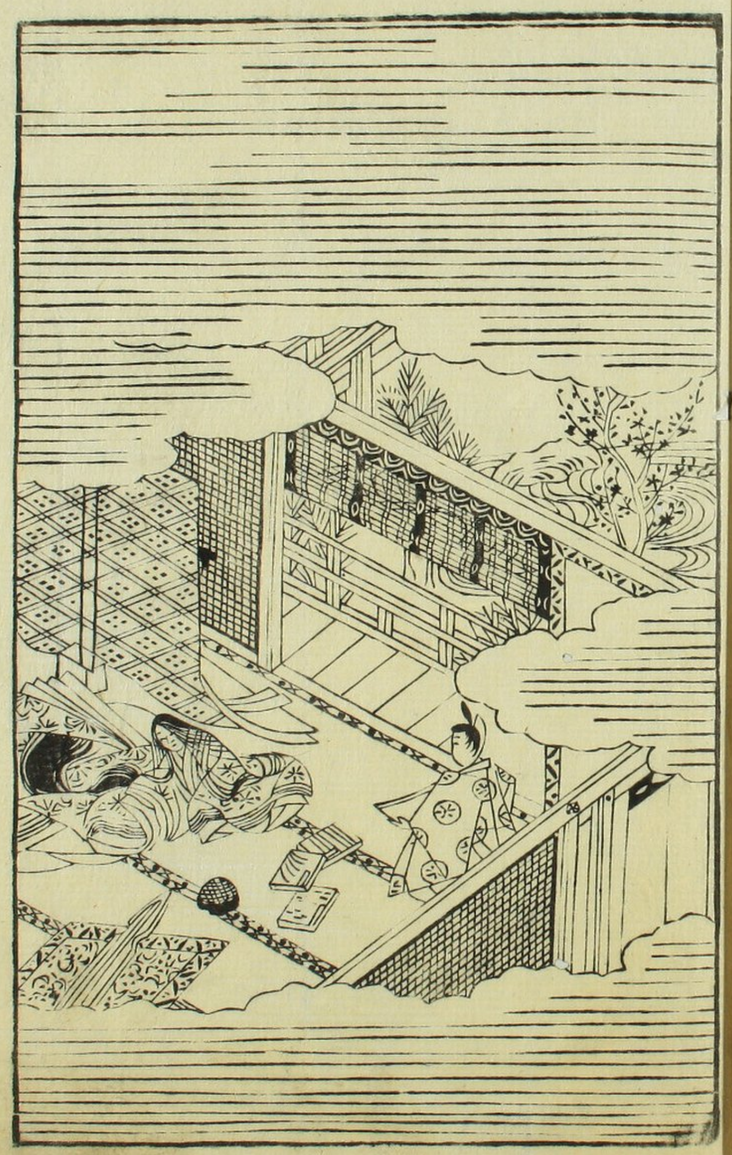


いとの松りうけてこそ見め
こゝにすもみへしを須の素又むらゆきの上の御
こゝにすもいかの女御秋の御うへこその紅葉の御あ
すゑこ進をもなをいたるの松なとり見つて
去年のことくわらうして御つかひを
花そのくこてふをさへやしこ葉より
秋まつむしいうゆくみるらん
この御ひて送りを出りしハいとおもしろき御
とをなりか橋のゝすハとゞめ書まみしこるすな
進もれなし所はかさし雲井のかりと又ハし女
なとりハ付ましくしくふえへし此花も見ち
厳りつりの庭のそしきなと此四季の心りて御
んつるんとれほしも

十七 玉鬘

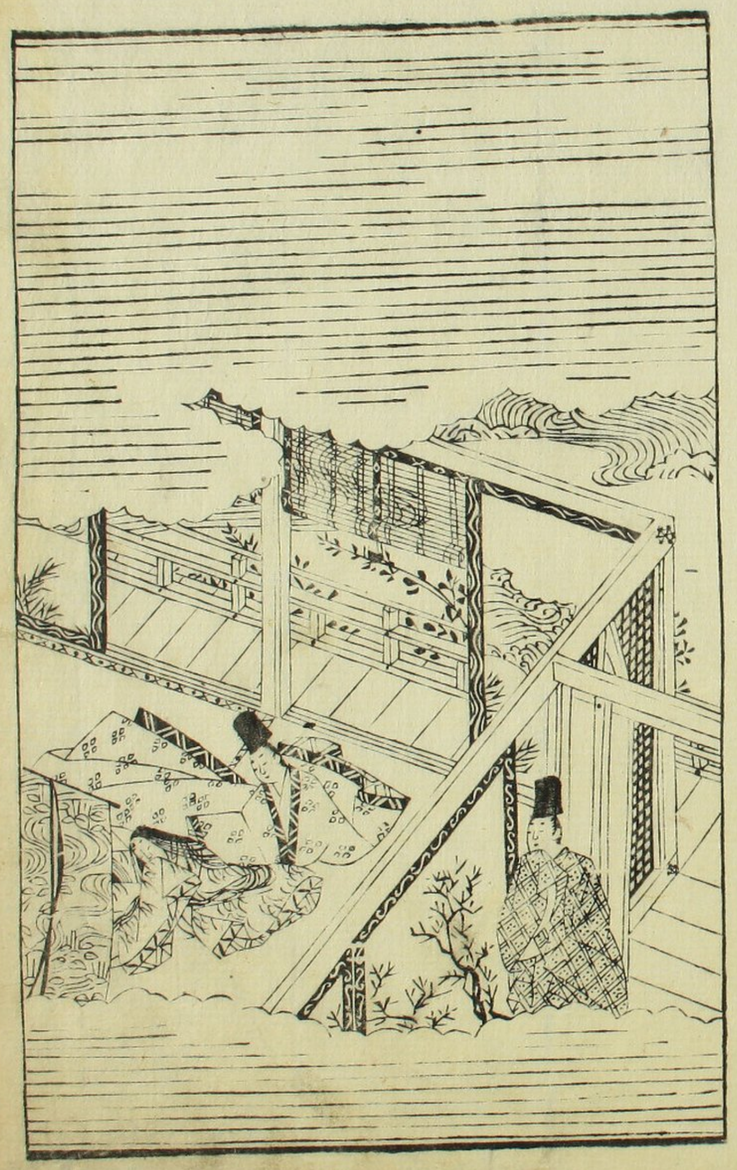
此書玉かつらといふ事第末の書より抽換せし
なてしこのすなるもしらさきの上の御うへは玉かつ
らの姫君の御くしよりの御ひしを右ハ
せりて乗りあひて源氏の御とく御中書つらしハ
むかへどりてもてなしかしはかせのふをもしらさき書
上いかれをもちの御程りかやうにうひてよこ御ひ
しなり
あひわらはれハそ進なれと玉かつら
いかなはすらをたつきつらん
とよ見御ひし故なり扱此玉かつらといふハ名かりの
上りもうなくとく進御ひしこと年ハふ
ともあ進御ひしさ内くへを見めふすもあへ





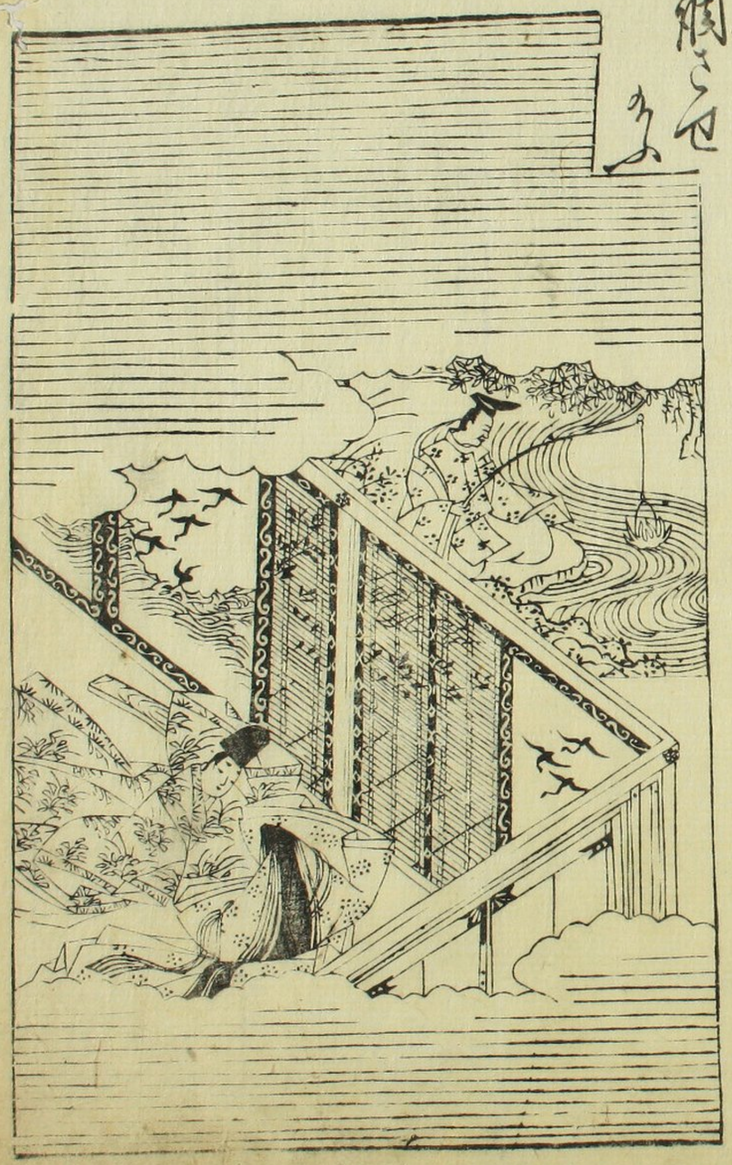
しうこめれいまひの鉾うち見のすき芸のとうの
源氏見せたてまつらせ給ひしなりそのおりの御
奇なかんし　但うもこれりの奇ハざし月の奇よりうへまあり
うもと水さけぬるいけのかゝ見たりハ
よれあらひなさうけそなるへら
こうまさせ給ひしなりけるなことをあませて紙表
れいまひなまハ付させのしへし

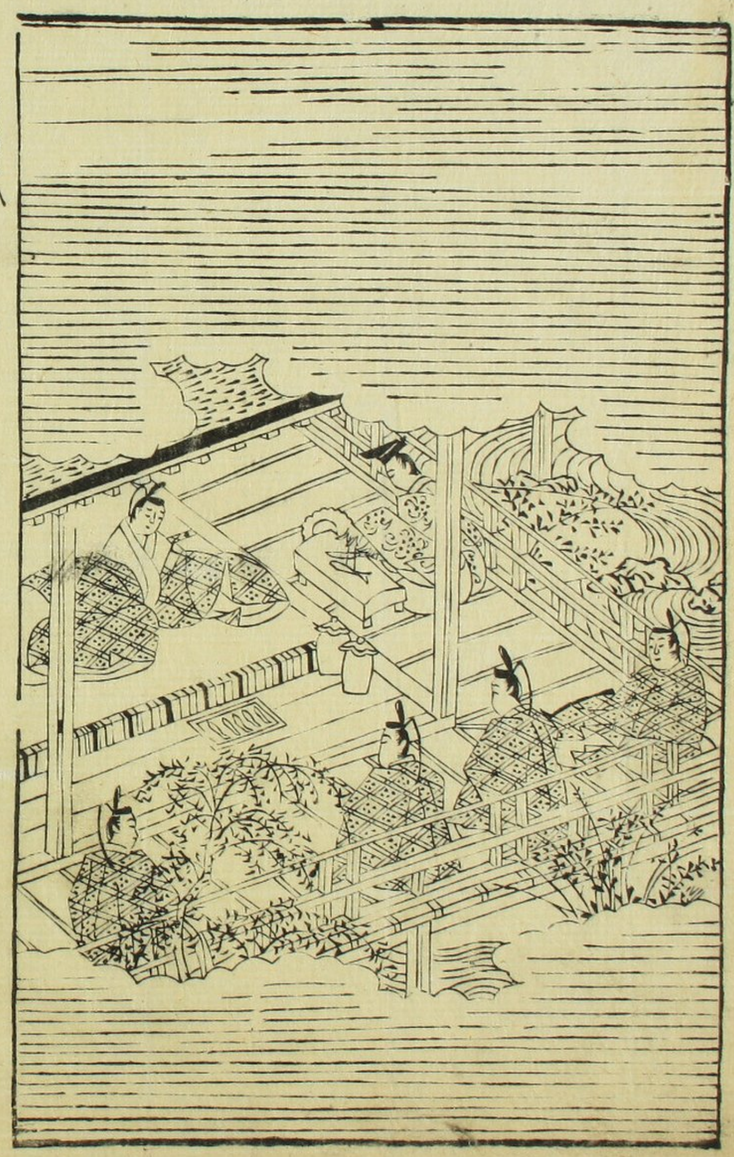
胡蝶　むかしのなるひ
此里こてふと云すハ昔ハ院の第一の人きけきな
と也宮雪より此積経ごていかめしき大法會ある



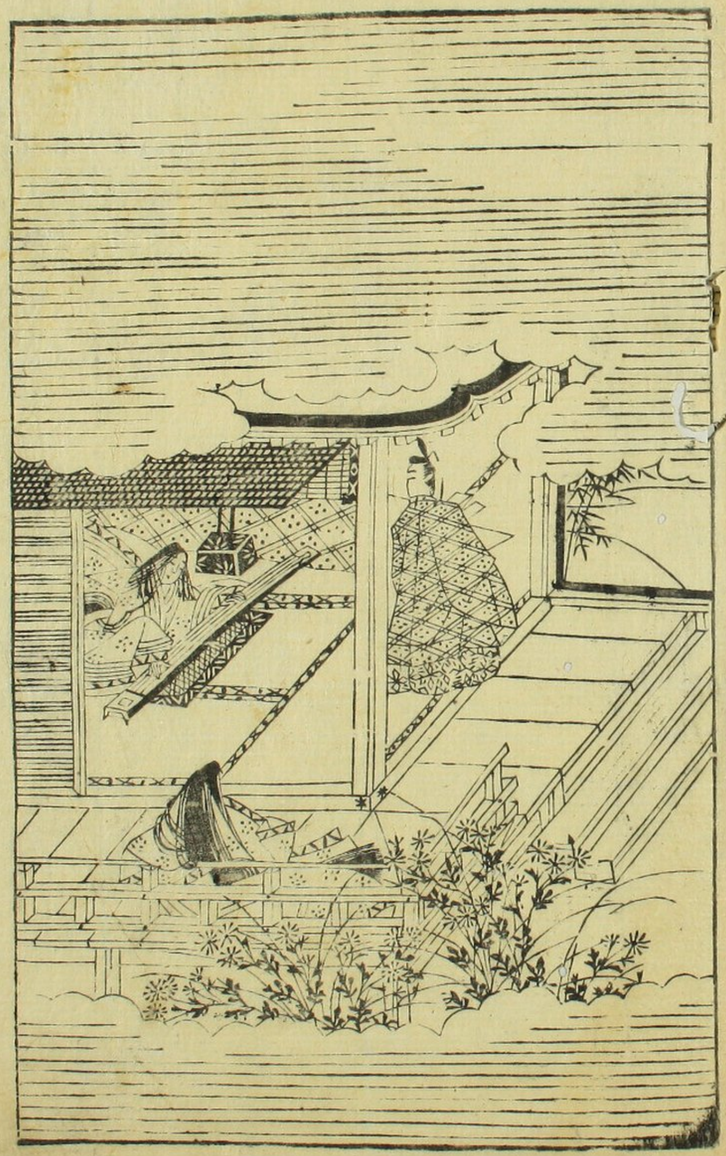
舞火（うまひ）　玉うつらのすゝひ

此書かつて火と云事そんし玉うつらを此字にし
てもくなしかふとしへとも鄙の此字なるは法
れうちまれむかしの此ことゝあをみそまうらやな
と此字にめし入て夜のよれ月なきよろをこし
なれなるし給り舞火（うちひ）をこりして此琴なるを
調させ
かふ





こゝにあるへし板壁つきのわさをんし所にて
風のごとくひろ氣を得ひしなり中風も時
石乃れくへたもしまして大きさの風のごとくひ
もうりぬてはまなく仰り得ふを仰見しとうを
てさうくしくたかしてはことをかのまかさなる
してありしの仕奇風
たかるこりたきのもをくは風のとゝを
もうかへとりはしひむちして



ごとくあるひしたかしろき事をなりその時のこ
とは
壁(のわき)分のあるを
風のごとくひ

萩の葉をこの風
なくこゑすを付へし壁かりて村夜ふりさる色
し毎と云ふ事ともあしくはあるへからを
御葉　むかうのすひ
此葉みゆきゆきにこゑは此行葉を大原壁の行葉
のうすなりさて此葉にいふ直上はかの源氏の作志の
ひのはなまいせんぬんすてたましましさ此は十二
月なり大原壁へみゆきし給ひし此はせんぬん
雪ふりきとしかの山本さろきしの
ふるさあしとをそふはたつのよ

源氏は此ゆ
なしかの山みゆきにも此ゆ松をうま
ふもとりなるあとやすらん

鶯なりなれハそのことは

みゆきさし　をしか山

ゆきさ　ふる紀あと

なといふるまへし源氏のたとくハみゆきの御法

なり

蘭　むろのなるひ

此事ふらもの後といふ久雪の大将の御前にて

むろの関係のうへにいまさひをくろの御りしへ掛

つ給ひてかしのこいりたもしまし志たりしと

給ひし

たなし瞳の露にやぬるしふらもの後

あもしはかけよかしもしらを

こよと給ひし故なるもふらもの後と云ふとこと

源氏のむりしの御にしたうとあふひの上の御あふハ掛政

関白なりかの久さるもりハ母かこのたちこくなて

此御母宮ハ桐つかのみとの御妹源氏なりを御拾も

久さつとの御さめまは御うもなりハむろの姫君

なりを御うもそうし此宮なく也給へハ中将

も此姫君も服まてくろさしろをときたまふ

こそ服もくしていうちの関係のうへに乗りかふ

へさうてうちよりの御つかひにかの中将をたてまろ

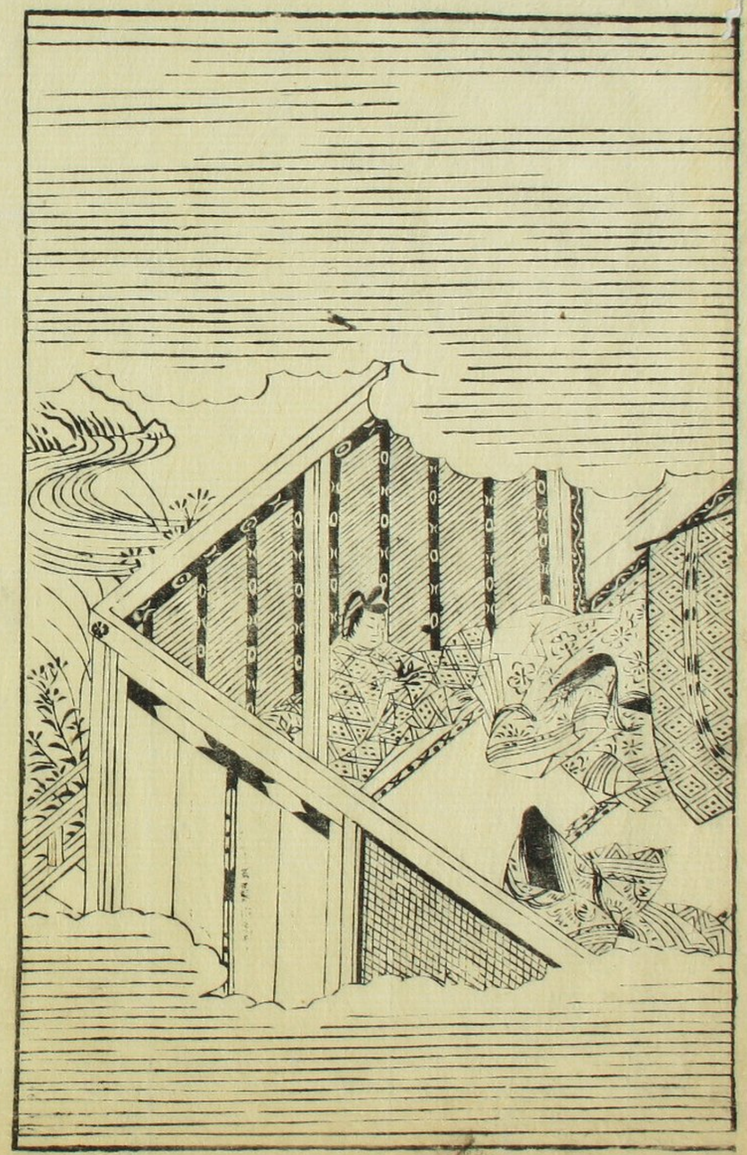
つを給ふり志たる心にハゆりしくたもしぬまもあら

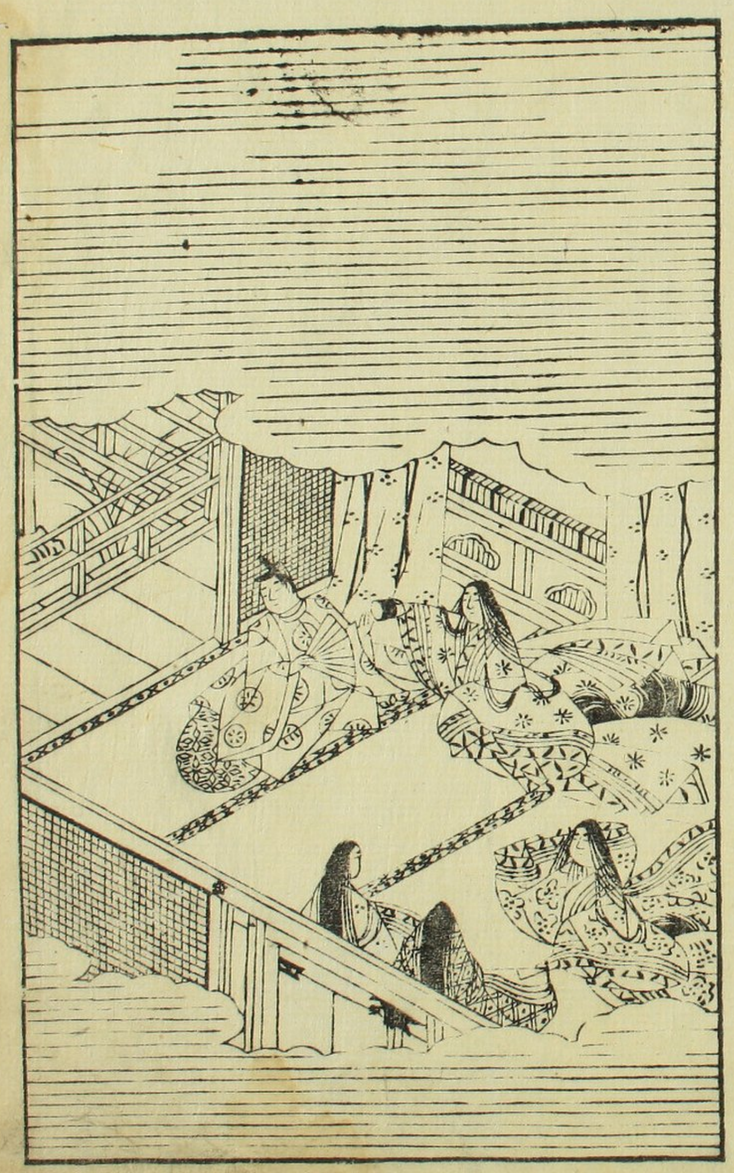
さらかれハ関のたかせるすちさりけいし給ふんと

いひなして蘭乃花のいとたりしろきとこしその内

へさしへて此うことをよまして御手をいさしかへさう

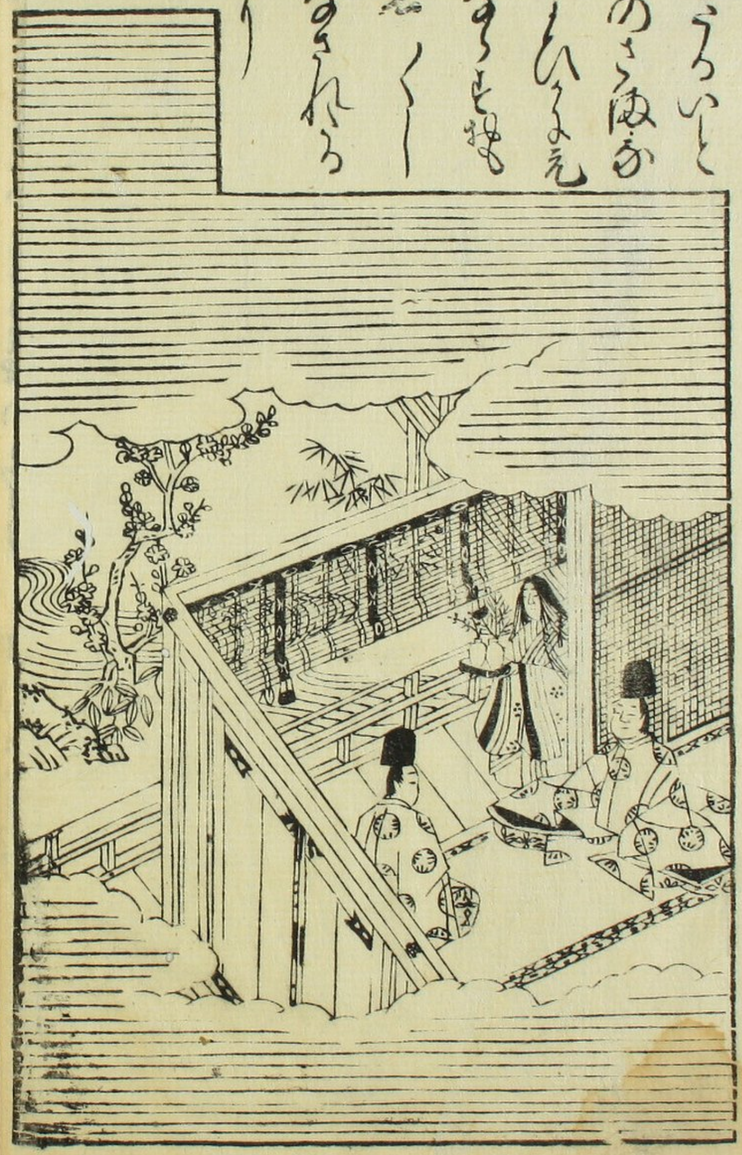
こうしらり

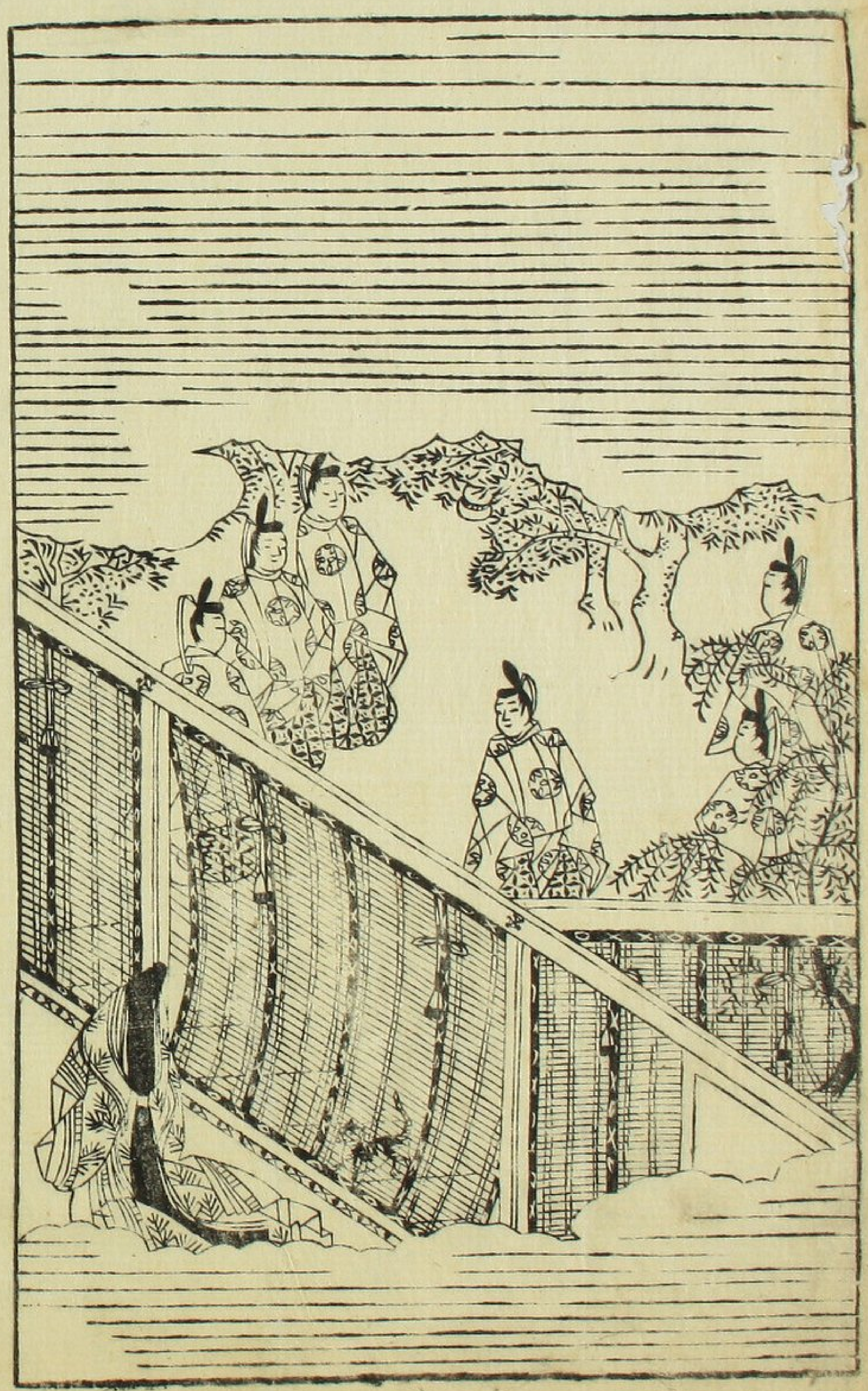




そまよりいとくうとましくなりもてゆきてぱ
ゐりかくもとなれかふ此ことは
大どりのもい　　梅のけ
うどむ
なといふ事付へし此ハ冬なり又は大ねをひきくろ
といふハ美名なりはひきのくろくたもしまして
見さ後なんしなとのことくぬはうつくしくハあ
らさりをめどをしなへてハあらをおうしくよれ
しさうたまくめやもときそうし後ハ関白なりて
関白のうえ小のまんとうろうけていうしくはうへ給
ひしはことなるを扱りしハきのゑもんのうえハまる
とうの中ねと申しうしろ此ゑうろの関白をわ
いかうとくをしうしてゑをとりけ申してはまる

たかふとも若ハしうしなりきくなる
いまもかあ乃いかしみし孫を
とよ見たてまつりしなり此ゑもんのうえをハ扱こ
そいまもかゆ中ねとをいひしかさやうのことへいふ
とをあらうへうをとりしハ木とゑうろハ中くひ
ぬくたりしましくをしらていひまうらしなるを
十八　梅枝
此書ハ梅ゑ云事正月晦日のうろ源氏の中ゑ
れ六てうの院なりてたき物あるせあらしこ連ハ
あるしの服のはむをめどうくう母氣りかふはいそ
きなり書ともを此方をへくもりていと見あるを
せあふせんさいゐんとかしハかのあさかのさいゐん
源氏なりしつまくて屋を給ひしへなり此はる

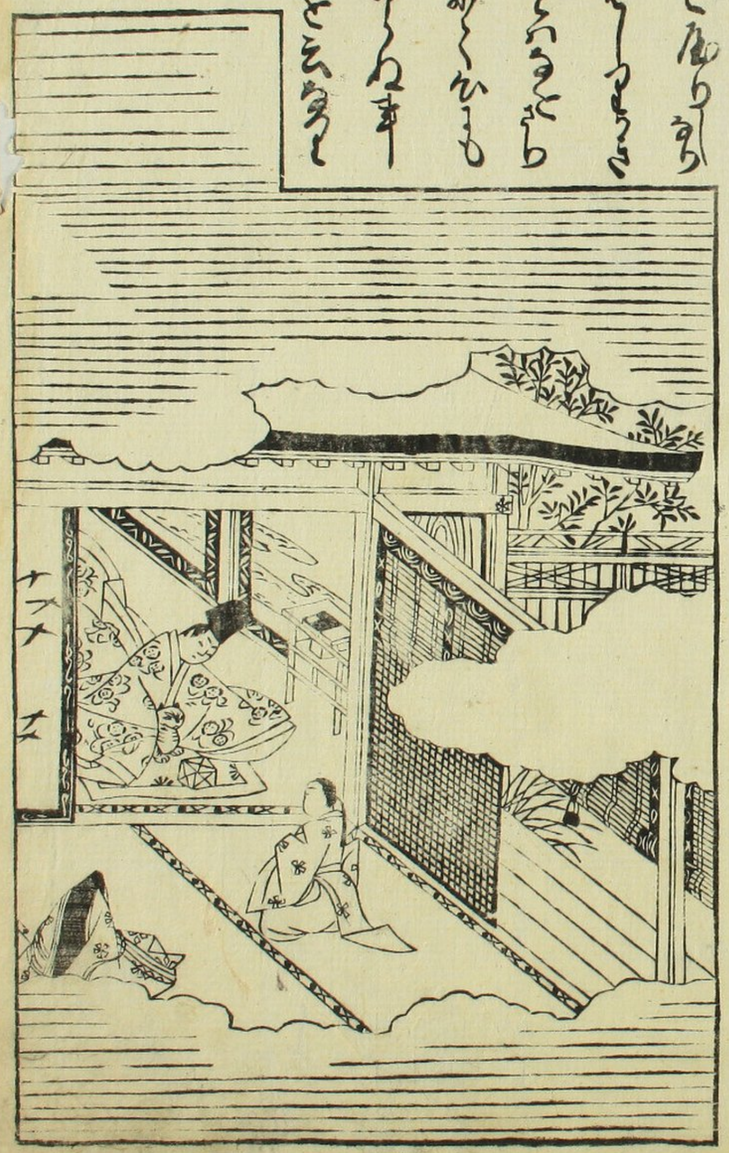


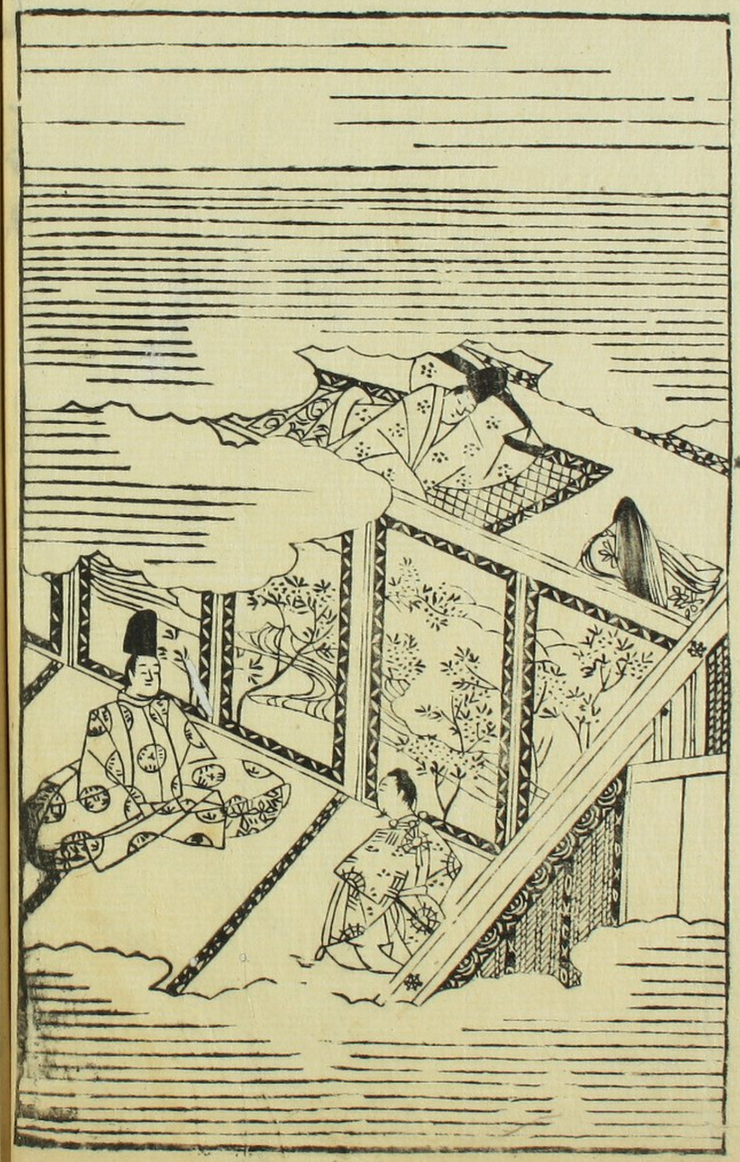


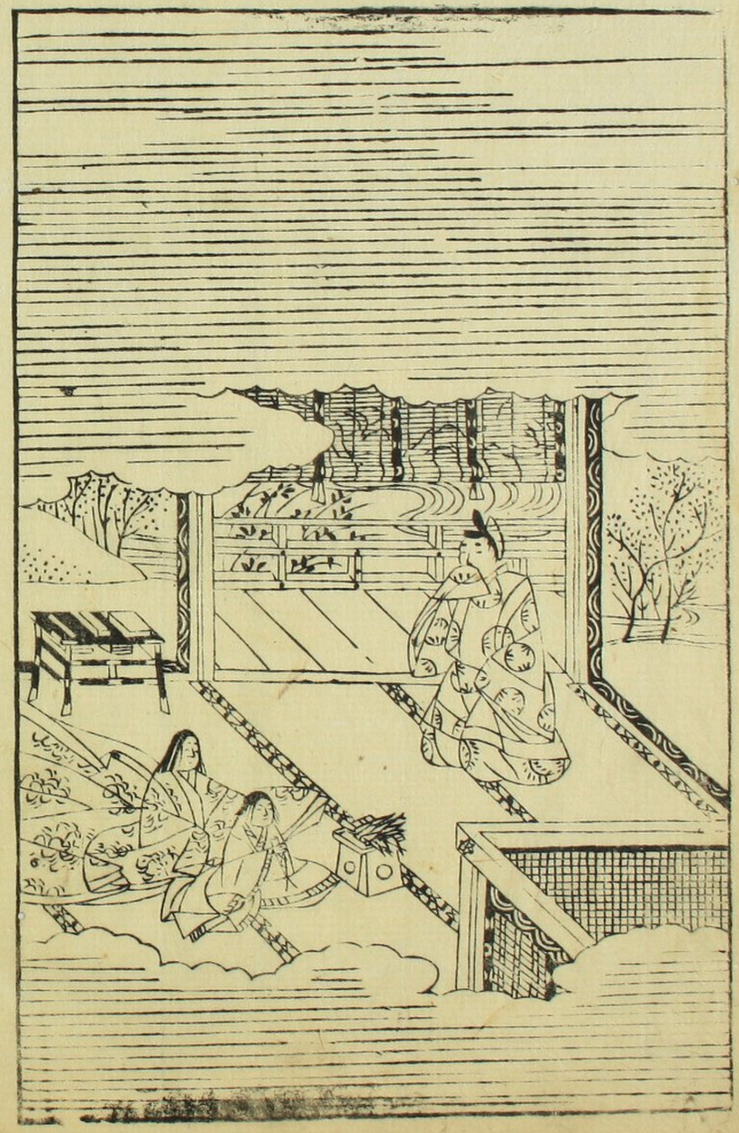
若菜(わかな)下

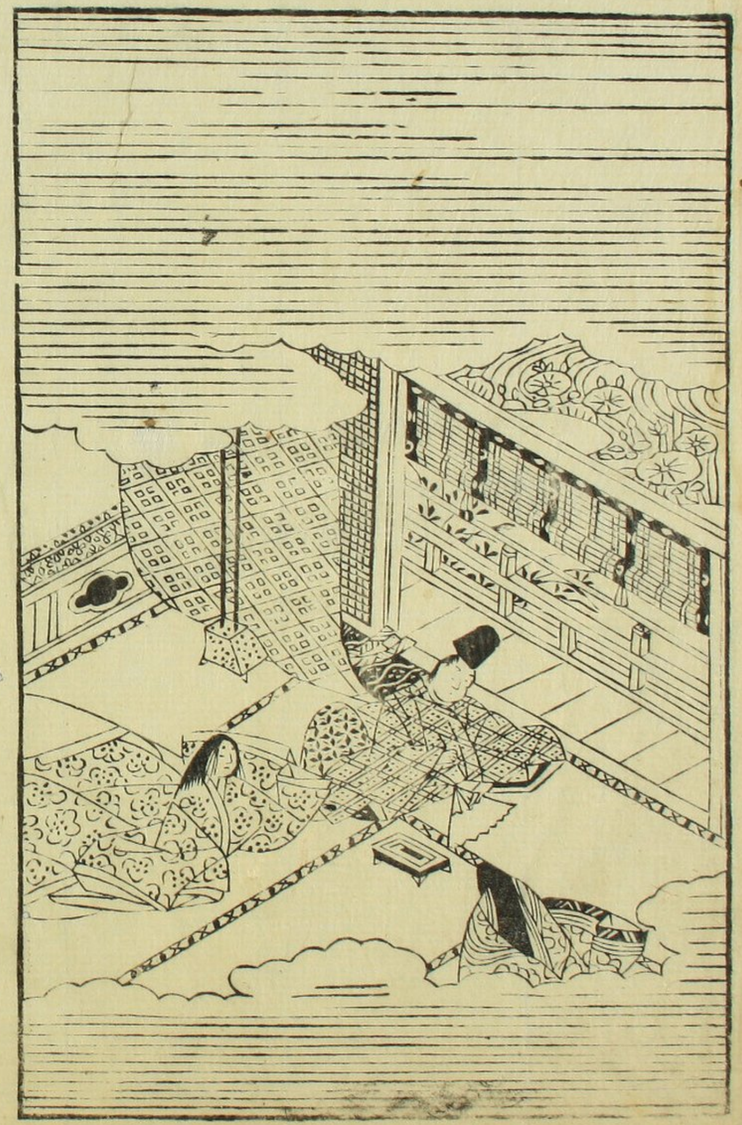
光る上よりかねのいとまこあまへたかしよこの
まさきりハ源氏すゑよし井あかゐ大

冷泉のわかうやまひをもつてひつき文五としにて
こうたいはゆ色のふ御ちくの春宮ハ朱雀院の御
子なりくれふしきなりもとみよしの御ゆめのめく
みなきくくれかりてひとりのとあまいふさく
のあまた人女三の宮なしにかりめを御くまひさ
つゐ住ひ御ちひしある住ハ十月九日の日そ
おほのこはそりまかくつかせかさきよりぬや
ありかうしてそれもひとり御ひしく入ゆふすつりて
あはれくとくつきそれ御車光みなわ絹
をみよしまくひとしの御へ明石すふはのそき御
と見やりてひしうされりひまへしつかもと代くへし
おもはかこの文とうしし木のきりんのみそく
御つりてたりひのけらすハ上の出きり六条院より







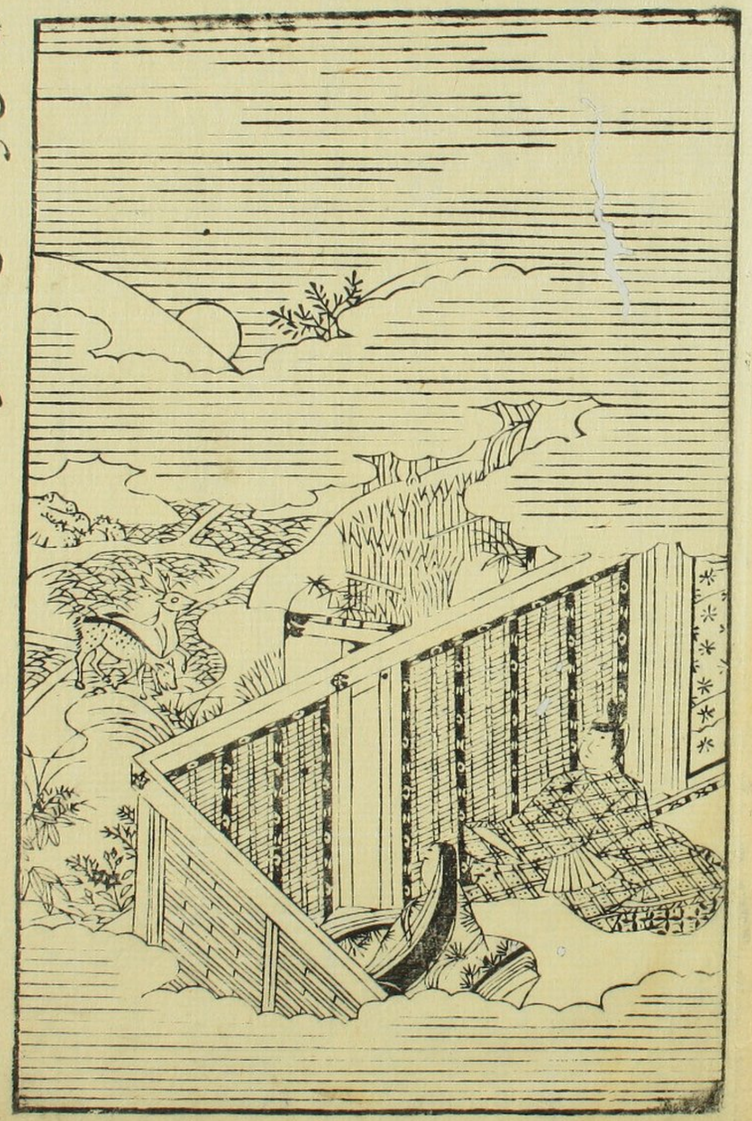


ごよと語ひし方の此夜なるを月く夜なくふりを
てうささすくむしのこゑなと言ふるへし

二十三 夕暮

此暮夕さりと言ふ大ねの小暦まくよりん語ひ
山さゝのあけ連をそふ夕さりは
今も出んそらもなき心地しく
どあるしゆへなり此暮ゆへりこそ大ねをハタ
きつるの大ねとをいひ分れ大ねの小暦れかよひ
ちハ此一条のおちるの家をふくゑをうけ語ふ
程りそのころ母家を不一条の家をて和しん
ひさし人ものくきりけつゝひ語ひていくゝ山
さゝりかやうのおられ那まやましらへ語ふ不
へうにろもせあふ大ねいとうなしくておもし
ふり此馬まゝかあふ屋をうち秋つさ小暦の
山のかし紀をこくあけ連なりうりおもしつき
て先れ此心ちをとらつゝひ語ひて後宮のゆる

此見そのまへ此そのこ母にてみそひきろき
わ[illegible]と云[illegible]女房よひ出してなふやかやの事大
の給ふり程なく日色くまてくきりふくさら
こめ波うきの志うもしのひ色なきこもよみを
たよりを乱あつめかつらんうもなきんちしてうち
かくしひて此所をよ見くさ夜ハとまりさまふ



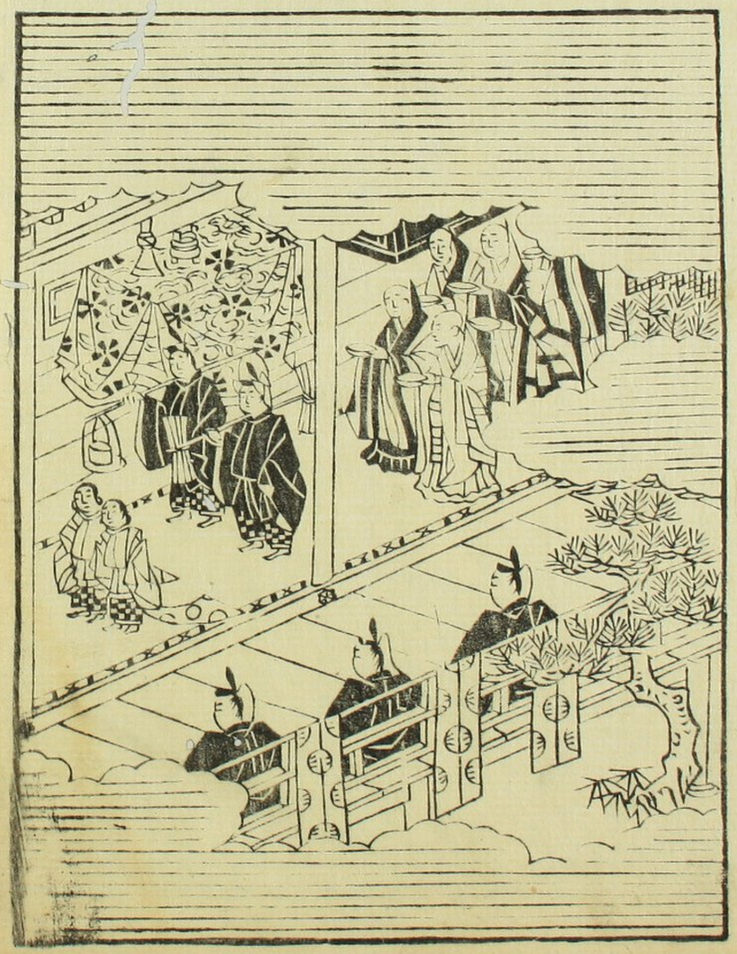
そのかとの云葉
久きつを
此山の紀のしゝ

秋ふり紀雁山
しゝのこ志

本紀のを見

なしくいふを小姓と云はつく也し去程より
曉へりかふとのへ此条所ゆるを取ゆるは交ひとく也う
くちつしくれかしめしてかき給ひもいく
せんとく交を不着しき心ちをしぬくり紀
給ふを取ゆるを大しやう此説する所を小の所に御
説し付給ひくうし給ふを此つゝを取給ひ
てかゝ所時のまき是ゆるを夜は小姓へれたし
内さくつましを母交を不かゝしき所なはさ
てをゆへしとうすきうこゆやれひなさ
きくいとく心ちもくるしくよはりもてく所ぬ
りかく是かふいとはしふしつまし交の所さめ
ゆり相也四十九日也なくすく所まくす

東へむへ事りく三条のとと十音所にかよひ給
ひしなり又此書につるものもと云ふ事と是
人のいとしきまゝはれちもの交此はかひしお物の
君といひし女房は所きの交を不のゆりなれは
かく是給ひし給うもく給そめ此志をやうを
さねをきく几帳ひさよせて大物のとふひま
れりしかりは對面せし事なり又此書に志の
ひし事なれはむまゝくれたし給ひしく所を
此なとへむさのゆともなしゆきくさまるをわつき
ゆむうへたまつら是よしの給ふ所是は小姓にくるを
のむさうつしをけなと云ふあへし是は秋乃給
なるを又みまやにあるし時ゆむさりうつしとり也
給ひてこ是うかんにあるすなるを小姓へいうまく



まつりのふ中ねの君

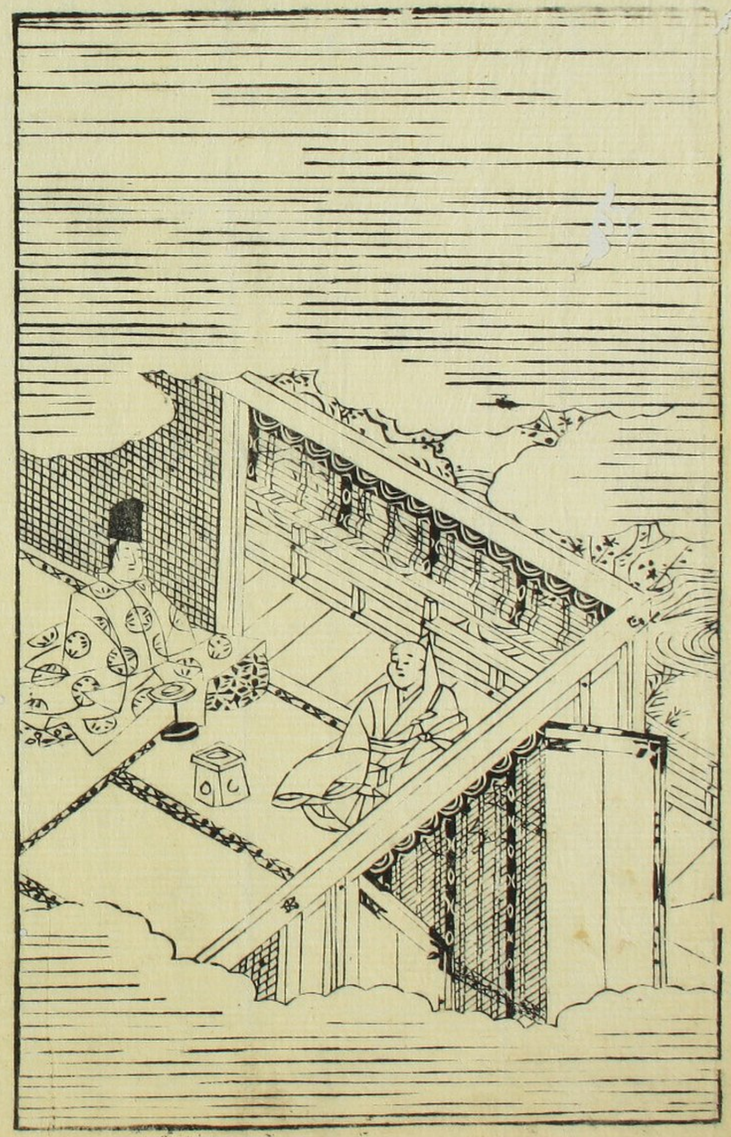
君こふはなみこはきえもなれ物を
そふとはなみのもとくといふらん

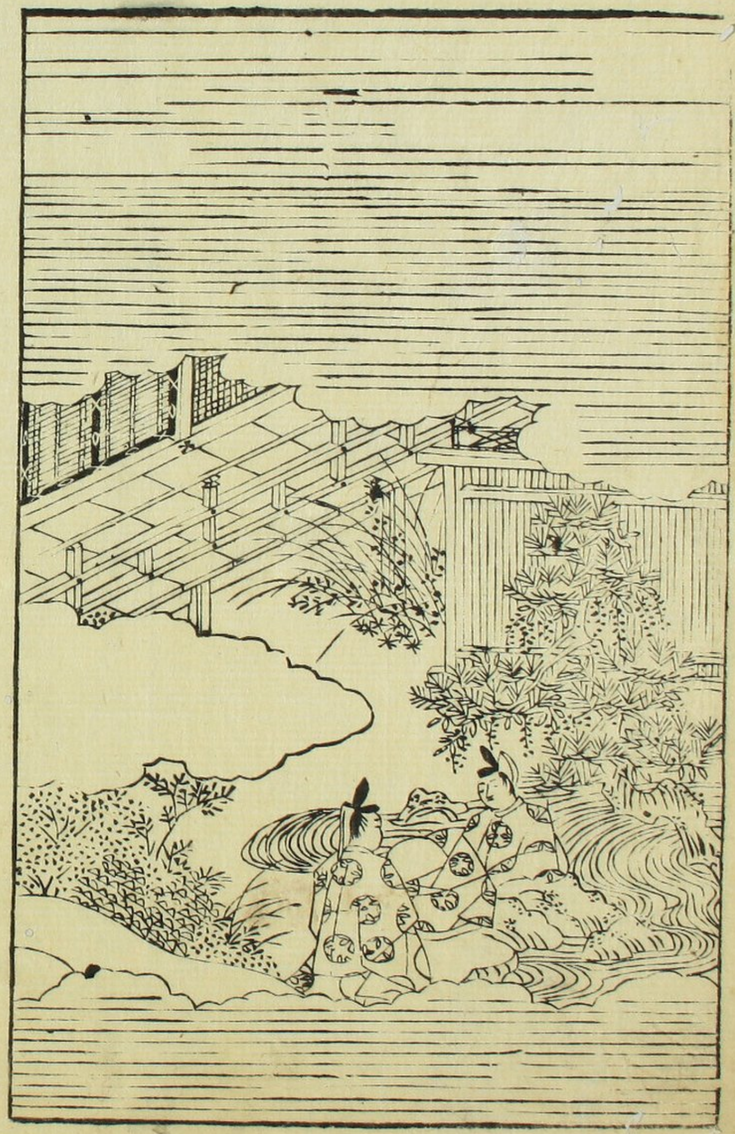
こ中ねの君れあふさうかこさまつりしを此後に
けり此公の中さこそたもしそめ九月九日より八
けさたりひさう菊を此後しくもひとりさりと
りかゝ秋なるしかなしひのふ邪な月まいさる
の雲もたれさなく何もれもつくてふちまし
こうちなかめく初と云音をよ見給ひしなり
十一月雲のあつりまい人きまさすむしのかすのたり
めし出く日かけ色きしとこひのふ此ハとけ
給ひんをちりさ此公より此まへ人二三人さふ
ちせ給ひくに此女方しもやきすくあふまい

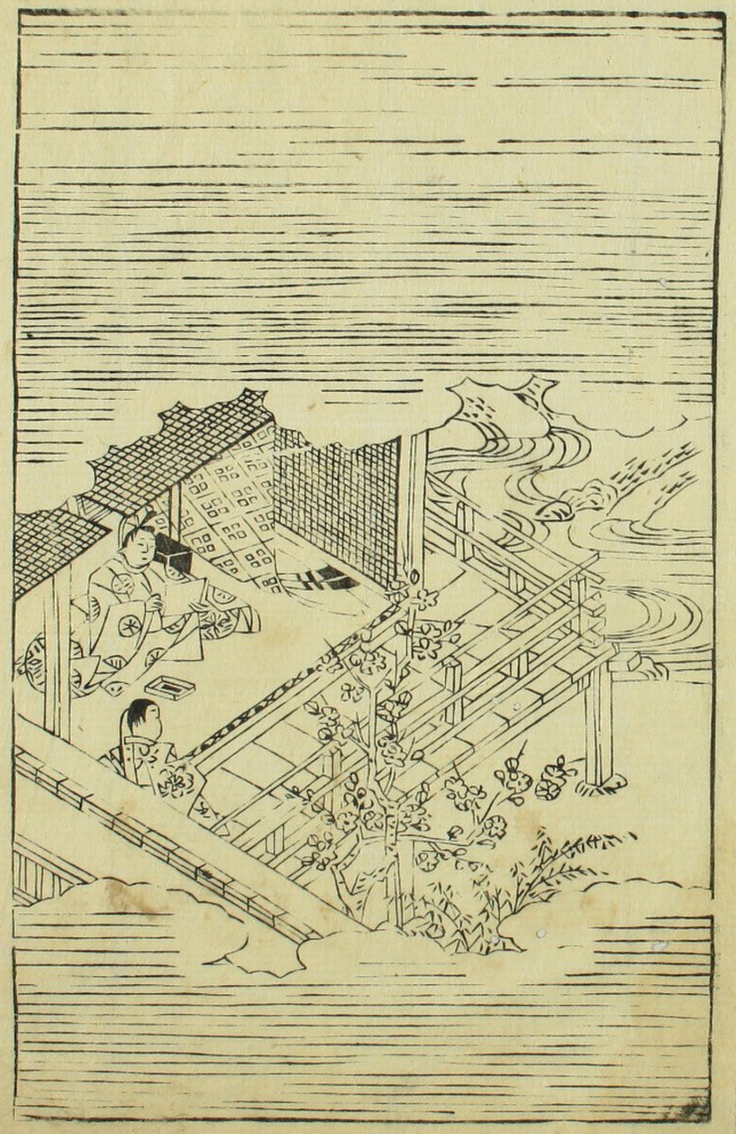
夜の迷の打所さまるを出まくまつり給ひそかなり
かのはまなかいてくりゆひあはせくそきけり
こしとの屋うなりはすこと付なとそまあとハ
しせのかゝ見なりと此世なりしれはりれを聖
りをなけき給ひそんよとしあて給へり
御門りはなこと夜きらかし給ひく

志くの山まし人を志こふとく
あとをみはくをたまとふ那

いうなりん道さてもちやたりし先しそんまれ
あつめひきゆひくかきつけ給へりそんしこ夜うま
うれ給へりかこさらふと 他邪みをか様まうき
付くみを屋うせあふと見しまり
かきはめくみはもかひなしもしか草







洗うなれどころを清(おの)、小細そう洗く見いれたるとて
ことをありその中よりまうしの行川ともいへり又
行川をまつ川いふ事をなりたなし事なるは
論を色うらすとなり